

西欧に於ける15c文化は諸国間の種々の交流から次第に均質化の過程を辿っているがその伝統に従って独自の性格を見せていた事も見逃せない。そして概括的に考える時、北欧は明らかに南欧に対比される伝統的特質が見られた。美術史学ではWölfflinの *Italian u. das deutsche Formgefühl* は芸術様式の基礎付けを芸術的“視”に於て捉え、又Worringerは精神史的な芸術意志による様式把握を試み、各々の民族の精神構造の相異を対比的に指摘している。服飾に於ける造型感覚乃至美意識の中にそれ等を見出し得るものが如何か。北欧圏フランスの中に一独立国のように繁栄し独自の過飾的なModeを形成した *Burgundian style* を中心にして試論したい。

方法 服飾史、美術史資料を中心として検討

結果. Huizinga はフランス中世末期の特徴として思考は想像力によりかゝり、すべてを目で見ようとする傾向—制御するものなき誇張と過剰とはついにその類例を他の時代に見出さない美意識がその奔放な情熱の赴くまゝに何をつくりだしたか、Modeの世界にあつてもつともよく観察しうるのだと述べている。Burgundian Modesはその先端をゆくもので *klemmin* 然り、Cartridge pleatsの *Pourpoint*、円錐、円筒状、炎形の帽子、爪先長の靴、*dagged design* 等、それ等一聯の過飾的傾向は貴族的優越と儀式的莊重を表出しながらも全体としては人体美表現の志向が明らかである。にもかゝらず、その個々部分において南欧のもつ分節的な明快な調和とは異なる北欧の抽象化或は生命化等の美的意志を指摘することが出来るのである。